

ミュージアム 通信

本は楽しい面白い -江戸庶民の読書-

[連載]

第三回 未来の匠

-次世代へ「技」を受け継ぐ人たち-
草木染作家

[かわら版]

企画展のご案内

講座のご案内

新商品のご案内



「木挽町新やしき小伊勢屋おちゑ」(部分)・喜多川歌麿 画・千葉市美術館所蔵

本は楽しい面白い -江戸庶民の読書-

版本の普及

読書の秋というが、日本では、いつ頃から誰でも本を手に取り、読むことができるようになったのだろうか。

江戸時代初め、出版市場の中心は京都だった。主に中国の古典類や仏教の経典類、和文古典などを木版印刷技術で量産し商品化したことで、上流階層の人々に独占されていたものが庶民階層に広がりが繁盛したのだ。元禄期(十七世紀後半)には、大坂で井原西鶴の浮世草子や近松門左衛門の浄瑠璃本がベストセラーになり、上方出版界はますます勢いを増した。

江戸は、というと、上方発出版市場拡大のための絶好の地であった。しかし、元禄期、浮世絵師菱川師宣の絵本出版により、江戸は独自の出版文化を見出す。婦女子向けの赤本・黒本に続き、青本・黄表紙

など草双紙の出版が活発になり、幅広い読者層を獲得することとなった。江戸出版界の巻き返してある。

庶民の娯楽本、目白押し

本の種類が多様になったことで、上方と江戸の出版業界は競合、本は二つに大分類された。上方出版界が扱う仏書・儒書・史書・和書古典などのお堅い内容の本を「物の本」、「書物」といい、江戸出版界が扱う青本・黄表紙・浄瑠璃本などの娯楽的な本を「草双紙」、絵が多くと「絵草紙」などといった区別されるようになった。明和期(十八世紀後半)に、多色摺木版技術の錦絵が誕生すると版本の表現力が豊富になり、化政期(十九世紀初め)には、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』や、為永春水の人情本『春色梅児誉美』などの出版により

版本のカテゴリーが確立、葛飾北斎や歌川広重ら浮世絵師も絵本を出版した。すると婦女子のみならず、男性の読者層も取り込み、ますます市場は拡大していった。

江戸の移動レンタル本屋さん

これらの本は、江戸の地本屋で販売されるだけではなく、貸本屋を通じて庶民にレンタルされた。貸本屋は、文化年間には江戸で六〇〇軒、大坂で三〇〇軒あったといわれるが、そのほとんどが店舗を構えなかった。書物・絵草子売りとして本箱を背負い歩き、得意先を回って本の売り・貸しを行った。本を貸す場合は、五〜七日ごとに見料を取っていた。見料は、一冊あたり八文程度。現代の金額に換算すると一文二十五円として、一冊二〇〇円程度かかったことになる。しかし、高価な本を買うよ

りも経済的だったのだ。本を買うことはできないが読書欲を満たしたい庶民にとって、貸本屋は、平凡な日常に流行や楽しい話題を運んでくれるプレゼント的存在だったのかもしれない。

変化する絵本

さて、婦女子が好んだ本はどんなものだったのだろう。式亭三馬は『浮世風呂』二編上・文化七年(二八一〇)で、「私どもの幼少な時分は、鼠の嫁入りや、昔咄の赤本がこの上なしてございました」と、女湯の客同士の会話を記している。

赤本は、表紙が赤いことからそう呼ばれ、寛文〜延宝期(一六六一〜八一)頃から享保期(十八世紀前半)に出版された子ども向けの絵本だ。もともと口承文化であった昔話に絵を添え、わかりやすく編集したので、子どもたちの玩具のひとつとして身近な存在であった。また、表紙の赤色には、疫病から子どもを守る呪術的な意味が込められていると考えられている。赤本は、次第に表紙や題材も変化し、黒本、青本、黄表紙と呼称も変わっていく。手のひらサイズの豆



「浄瑠璃本を持って立つ女」・作者未詳・山口県立秋美術館・浦上記念館所蔵

本や、墨一色から多色摺りの絵も加わるなど幅広く展開していった。大ベストセラーの読本『南総里見八犬伝』も編集し直された。版元は、挿絵を増やし、長文を短文にし、更に漢字に仮名をふるなどし、子どもや女性に好まれるような工夫をしたのだ。これにより、ますます読者層は拡大していった。

こういった版元の需要拡大を狙った努力は、現代でも日本人が得意とする気配りビジネス戦略法といえる。ついつい本を手に取り、読みたくなってしまう…庶民の読書欲をくすぐる巧妙な仕掛けは、当時の出版業界に関わる文化人と版元の仕業だったのだ。

そして、その背景には、識字率七〇%以上(十八世紀)という国際的にみても群を抜いたレベルの日本人の教養があった。

「次世代へ「技」を受け継ぐ人たち」

草木染作家

諏訪 豪一さん・好洋さん

日本の「技」を受け継ぐ若き職人たち。今回紹介するのは草木染作家、諏訪豪一さん・好洋さんです。

日本には四季がある。古より人々は、移ろいゆく季節を愛で、その時々

の草花を楽しんできた。合成染料を一切使わず、天然由来の素材から抽出した色素だけを用了た草木染は、そんな四季折々の恵みによる色彩を重ね合わせ、優美な世界を表

現する。山形県米沢市にある野々花染工房の諏訪豪一さん・好洋さん兄弟は、日々自然と向き合いながら、作品を紡ぎ出している。野々花染工房では、十年を修行期間の目安とし、技術の習得はもちろん、ものづくりについても真剣に考える時間を与えられる。現在豪一さんは修行を終え、工房長として現場をまとめる立場に。好洋さんは、糸を染める染場を中心に修行をしつつ、師匠である父のもと、デザインを学び始めている。「糸に逆らってはいけない。力づくでやっても絶対糸はへそを曲げる」

これは諸先輩方から教えられた言葉だ。自然が相手のものだから、時には想定していたものと違う色が出ることもある。それでも途中で投げ出さ

ず、最後まで染め上げる。出た色をすべて受け入れ、いつか来る出番のために、大切に保管する。無駄にする糸はひとつとしてない。自然からの恩恵を無にすることなく、柔軟で寛容な心が草木染には必要とされる。

接した時、藍への思い入れがまた格別なものとなった。その思いは、作品に紡ぎ上げられ、作品と共にお客様へと届く。「人と人が気持ちでつながり、それが作品に表現され、手にしたお客様が感動して喜びの言葉をかけてくださる。これがこの仕事の幸せなところだ」

感覚派と自らを表現する兄と、内に秘めた熱い思いをのぞかせる理論派の弟。織物の縦糸と横糸のように、兄弟がお互いを引き立て、補い合いつつ作品を生み出す日が、そう遠くない日に来るであらう。



桜の枝で染めた地色に紅花染めの糸で桜の花びらを描き出した作品「花の宴」



染め上がった糸の色味を確認する兄・豪一さん

以前、豪一さんが藍の産地・徳島を訪れた時、ほんの小さなスクモまで集めていた場に遭遇した。丹精込めて作ったものを無駄にせず、全て集めて出荷する。その気持ちに

「草木染にはすでに完成された世界があるので、大きなことは考えていません。むしろそこから離れてしまふのは面白くないですから。この完成

された草木染の世界の中で、それでも工芸という枠に閉じ込められることなく、自分らしいものづくりをし、次の世代を動かしていけるような魅力を見せていきたいと思っています」

※ 藍の葉を原料とした染料。これを固形化したものが藍玉である。

野々花染工房

http://www.omne.jp/~nonohana/



桜の枝を錠(なた)で粉砕し、抽出前の下準備をする弟・好洋さん

「糸に逆らってはいけない。力づくでやっても絶対糸はへそを曲げる」これは諸先輩方から教えられた言葉だ。自然が相手のものだから、時には想定していたものと違う色が出ることもある。それでも途中で投げ出さ

ず、最後まで染め上げる。出た色をすべて受け入れ、いつか来る出番のために、大切に保管する。無駄にする糸はひとつとしてない。自然からの恩恵を無にすることなく、柔軟で寛容な心が草木染には必要とされる。

接した時、藍への思い入れがまた格別なものとなった。その思いは、作品に紡ぎ上げられ、作品と共にお客様へと届く。「人と人が気持ちでつながり、それが作品に表現され、手にしたお客様が感動して喜びの言葉をかけてくださる。これがこの仕事の幸せなところだ」

野々花染工房

赤一色、白磁に映える千変万化の文様世界
「華雅やきの赤絵細描―九谷赤絵の妙技」展

2010年10月16日(土)～12月12日(日)開催

企画展観覧料300円

この秋、紅ミュージアムでは、九谷焼の伝統的絵付技法「赤絵細描」に焦点を当てた企画展を開催します。

江戸時代前期は明暦の頃(一六五五―一六五七)、日本を代表するやきもののひとつ「九谷焼」が、加賀藩江沼郡九谷村で誕生します。

誰しもが一度は目に、耳にしているこの陶磁器は、その長い歴史の中、様々な画風が生まれ、今日に受け継がれてきました。古九谷以来の代表的な様式である青手・五彩手、そして再興九谷以降の吉田屋風・飯田屋風・永楽風・庄三風など、九谷焼の画風は他のやきものに類を見ないほど豊かです。多様な多彩な画風こそが、九谷焼の最大の魅力と言えるでしょう。

本展では、これらバラエティに富んだ九谷焼の画風の中から、飯田屋風、すなわち赤絵細描様式を取り上げます。赤絵細描は、白磁胎の上に極細の筆で、髪の毛よりも細い赤い線を描き詰め、文様意匠を作り上げていく上絵付技法を指します。赤一色、あるいは金彩を加えて描き出される文様世界は、ま

さに千変万化。緻密精巧にして美麗、超絶技巧の九谷赤絵の世界を、江戸後期から現代に至るまでの優品と共に紹介します。この機会に是非、赤絵細描の「華雅やき」をご堪能ください。

協力 石川県九谷焼美術館・金沢卯辰山工芸工房・九谷焼窯跡展示館・能美市九谷焼資料館／福島武山ほか(敬称略)



Information

かわら版

講座のご案内

企画展「華雅やきの赤絵細描―九谷赤絵の妙技」に関連して、下記講座を開催いたします。

■ 講演会「九谷焼・赤絵細描」

講師：福島武山氏

2010年11月13日(土) 14:00～15:30 ■定員：15名 ■聴講料：無料

■ 体験講座「赤絵細描 絵付講座」

講師：福島武山氏

2010年11月14日(日) 13:00～16:00 ■定員：8名 ■参加料：5,000円

【九谷焼 伝統工芸士・福島武山プロフィール】(1944-)

九谷焼伝統工芸会会長、日本工芸会正会員。全国伝統的工芸品公募展にて第一席グランプリ内閣総理大臣賞受賞、伝統九谷焼工芸展にて大賞受賞、そのほか伝統工芸界の主要な賞を多数受賞。現在、赤絵細描の第一人者として活躍する傍ら、制作の合間を縫って後進の育成にも力を注ぐ。

新商品のご案内

伊勢半本店では、9月25日(土)～11月30日(火)の間、小町町『手毬』を期間限定発売いたします。今秋は、七五三に相応しい手毬・菊・桔梗の3柄を販売。女のお子様初めて点す口紅には、本紅をおすすめいたします。



Since 1825

伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間／11:00～19:00 ●休館日／毎週月曜日

(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車

B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>